

緑地管理関係 除草剤 成績概要用紙【A. 裸地管理 I. 草刈り軽減】

薬剤名	試験場	試験条件	使用量 (g・mL /m <sup>2</sup> )	除草効果(無処理区比:%)							効果発現の遅速	抑草期間 (日)	判定	所見
				一イネ			一非							
ABC-123 水溶性	〇〇県農業試験場	目的: 草刈り軽減	無処理										・ヨザは0.75g/m <sup>2</sup> 処理でも残草したが、その量は僅かであった。 ・効果の持続期間は0.25g/m <sup>2</sup> で60日、0.5g/m <sup>2</sup> 処理区で100日程度であった。 ・一年生雑草を対象に実用化可能。	
		区分: 空き地												
		土壌条件: 火山灰・埴壤土												
		処理時期: 雑草生育期 (H00/6/7)												
		処理方法: 全面茎葉兼土壌処理												
		散布水量: 100mL/m <sup>2</sup>												
		調査日: H00.6.27												
処理時の雑草の状態:														
	被度(%)	草高(cm)												
	アノコサ	4	42	0.25g <100mL>	5	3	8	0	0	0	速	60日	○	
	ヒバ	3	13	0.5g <100mL>	1	0	2	0	0	0	速	100日	○	
	ヨザ	30	41	0.75g <100mL>	0	0	3	0	0	0	速	100日以上	○	
	ブクサ	40	40	対照 △△△水溶 0.5g <100mL>	7	2	4	0	0	0	速	100日	○	
	ハバ	2	10											
	材ノガリ	1	14											

記入の要点

無処理区対比(%)を数値で記入

コメントを記載

1. 試験条件

- 1) 目的: 「草刈り軽減」、「根絶」を記述する。
- 2) 区分: 農道、畦畔、一般道、休耕地などの区分を記述する。
- 3) 処理時期: 発生前、生育期など雑草の状態と処理日(月日)を記述する。
- 4) 処理方法: 茎葉処理、土壌処理から選び、記述する。
- 5) 処理時の雑草の状態: 主要雑草の被度(%)と草高(cm)を記述する。

2. 使用量: 1m<sup>2</sup>あたりの製品量で示す。

3. 除草効果: 茎葉処理及び茎葉兼土壌処理は最大効果発現時、土壌処理は処理後30~60日を目安に残草量の無処理区対比を一年生イネ科、一年生非イネ科、多年イネ科、多年性非イネ科、その他を区別して草種別に記述する。

尚、種類の表示は下記の様に略して記載する。

一年生イネ科: 「一イネ」、一年生非イネ科: 「一非」、多年性イネ科: 「多イネ」、多年性非イネ科: 「多非」、その他: 「他」

4. 効果発現の遅速: 変色、葉枯れ、萎凋などの症状が、処理後2~3日以内... 「速」、それ以降... 「遅」と記述する。

5. 抑草期間: 薬剤処理後、次の防除が必要になった日までの日数を記述する。

6. 判定: ○、△、×で記述する。

「○」: 実用に供しうると考えられるもの、「△」: 結論が出せない、再検討が必要なもの、「×」: 実用性が期待できないもの。

7. 所見: 試験の要約、実用化に対する所見、今後の問題点等を記述する。

緑地管理関係 除草剤 成績概要用紙【A. 裸地管理 II. 根絶(タケ・雑かん木)】

薬剤名	試験場	試験条件	使用量 (g・mL /㎡)	草種	除草効果(処理後からの日数)				効果発 現まで の日数	除草 効果	抑草 期間 (日)	判定	所 見
					+30	+90	+180	+300 (翌春)					
ABC-123 水溶性	〇〇県農業試験場	目的: 根絶											・効果の発現は遅く、処理後90 ~120日目頃より黄化症状が認 められた。 ・処理後180日後にはすべての 個体で落葉し、生育は完全に停止 した。 ・翌春(処理後300日後)調査では けりうがりの再伸長は認められな かった。
		区分: 竹林											
		土壌条件: 火山灰・埴壤土	0.25g <100mL>	モウソウダケ	×	×	○	◎		120	大	○	
		処理時期: 幼生育期 (H00/5/12)	0.5g <100mL>	モウソウダケ	×	×	◎	◎		120	大	○	
処理方法: 全面土壌処理													
散布水量: 100mL/㎡													
処理時の雑草の状態:													
草高(m) 幹径(cm)	0.75g <100mL>	モウソウダケ	×	△	◎	●		90	極大	○			
けりうがり 7~8 8~10	対照 △△△水溶 0.5g <100mL>	モウソウダケ	×	×	○	◎		120	大				

記入の要点

1. 試験条件

- 1) 目的: 「草刈り軽減」、「根絶」を記述する。
- 2) 区分: 農道、畦畔、一般道、休耕地などの区分を記述する。
- 3) 処理時期: 発生前、生育期など雑草の状態と処理日(月日)を記述する。
- 4) 処理方法: 茎葉処理、土壌処理から選び、記述する。
- 5) 処理時の雑草の状態: タケ/雑かん木の草高(m)と幹径(cm)を記述する。

2. 使用量: 1㎡あたりの製品量で示す。

3. 除草効果: 経時的に観察を行い、茎葉の変色、落葉程度を記号で示す。

- (枯死と判断): 株全体が変色(黒色、黄色等)および落葉, ◎: 株の大部分(60%以上)が変色および落葉,
- : 株の半分程度(30~60%)が変色および落葉, □: 株の一部(30%以下)が変色および落葉,
- △: わずかに変色または落葉, ×: 症状なし

6. 抑草期間: 薬剤処理後、次の防除が必要になった日までの日数を記述する。

7. 判定: ○、△、×で記述する。

「○」: 実用に供しうると考えられるもの、「△」: 結論が出せない、再検討が必要なもの、「×」: 実用性が期待できないもの。

8. 所見: 試験の要約、実用化に対する所見、今後の問題点等を記述する。

根絶を目的とする試験は、翌春調査の結果を処理当年の結果に続けて記載する

コメントを記載

緑地管理関係 生育調節剤 記入例 【B. 緑地維持 I. 抑草】

薬剤名	試験場	試験条件	使用量 (g・mL /m <sup>2</sup> )	草種		茎葉 への 影響	全体の植被率(%)と平均草高(cm)				抑草 期間	判定	所見		
							植被率 (%)	草高 (cm)	植被率 (%)	草高 (cm)					
ABC-123 粒剤	〇〇〇県農業試験場	目的: 抑草 区分: 空き地 土壌条件: 火山灰・埴壤土 処理時期: 雑草発生始期(H00/5/6) 処理方法: 全面土壌処理 散布水量: - 処理時の雑草の状態: 被度(%) 草高(cm) アノコグサ t 3 ヒメ 1 1 シロ 3 2 イノ 5 7	無処理	(種類)	(草種名)								・雑草発生始期に処理を行った。 ・アノコグサ、ヒメ、シロに対しては40~45日程度の抑草期間が認められた。 ・イノは黄化、褐変症状が強く現れ枯死した。 ・一年生イネ科雑草優占地の刈り取り軽減剤として実用化可能と考えるが、有効草種についてさらに検討が必要である。		
				一休	アノコグサ		62	25	100	70					
			20g	一非	シロ										
				多非	イノ										
				一休	アノコグサ	+	24	8	96	40	40日	〇			
			30g	一非	シロ	+									
				多非	イノ	+	13	9	89	50	45日	〇			
				一休	アノコグサ	+++									
			40g	一非	シロ	+									
				多非	イノ	+	35	8	70	30	40日	〇			
				一休	アノコグサ	+++									
			対照 △△△粒 40g	一休	アノコグサ	+									
一非	シロ	+		24	8	96	40	40日							
		多非	+++												

コメントを記載

記入の要点

1. 試験条件

- 1) 区分: 農道、畦畔、一般道、休耕地などの区分を記述する。
- 2) 処理時期: 発生前、生育期など雑草の状態と処理日(月日)を記述する。
- 3) 処理方法: 茎葉処理、土壌処理から選び、記述する。
- 4) 処理時の雑草の状態: 主要雑草の被度(%)と草高(cm)を記述する。

2. 使用量: 1 m<sup>2</sup>あたりの製品量で示す。

3. 草種と茎葉への影響

茎葉への影響を、一年生イネ科、一年生非イネ科、多年イネ科、多年性非イネ科、その他を区別して草種別に最大影響時の程度を記述する。

「-」: 変色や奇形などの症状がない、「+」: 変色または奇形が若干あるが、美観上問題無い、

「++」: 変色または奇形がかなりあり、美観上問題がある、「+++」: 変色または奇形が著しく、美観上問題があり、枯死する場合もある。

尚、種類の表示は下記の様に略して記載する。

一年生イネ科: 「一休」、一年生非イネ科: 「一非」、多年性イネ科: 「多休」、多年性非イネ科: 「多非」、その他: 「他」

4. 全体の植被率(%)と平均草高(cm)

対象雑草群落全体の植被率と平均草高を処理後30日頃と次の防除が必要になった時期の2時期について記述する。

5. 抑草期間: 薬剤処理後、次の防除が必要になった日までの日数を記述する。

6. 判定: 〇、△、×で記述する。

「〇」: 実用に供しうると考えられるもの、「△」: 結論が出せない、再検討が必要なもの、「×」: 実用性が期待できないもの。

7. 所見: 試験の要約、実用化に対する所見、今後の問題点等を記述する。

緑地管理関係 除草剤 成績概要用紙 【B. 緑地維持 II. 特定植生の維持】

薬剤名	試験場	試験条件	使用量 (g・mL / m <sup>2</sup> )	除草効果 (無処理区比:%)				効果発現の遅速	抑草期間 (日)	特定植生への影響		判定	所見						
				一非		多非				症状	程度								
ABC-123 液剤	〇〇県農業試験場	目的: 特定植生の維持	無処理	一非		多非							・各薬量ともに対象草種に対し除草効果高く、60日間程度の抑草期間が認められた。 ・セチピードグラスは0.2mlおよび0.3ml/m <sup>2</sup> 処理区で影響が認められたが、処理後30日後には葉色は目立たなくなり、生育も回復した。 ・以上のことより、セチピードグラスの植生維持場面での雑草防除が可能である。						
		センチピードグラス		ヤハズソウ	ヒメムカシヨモギ	チドメグサ													
		区分: 道路側面の緑地帯		6%	2%	3%													
		土壤条件: 花崗岩・植壊土		15cm	8cm	12cm													
		処理時期: 生育期(H00/6/25)		%	%	%													
		処理方法: 全面茎葉処理		0.1mL <100mL>	5	0	0								速	60	—	無	○
		散布水量: 100mL/m <sup>2</sup>		0.2mL <100mL>	0	0	0								速	60	変色	小	○
調査日: H00.6.27	0.3mL <100mL>	0	0	0		速	60	変色、生育抑制	中	○									
処理時の雑草の状態:	対照	12	0	0		遅	80	変色	小										
	被度(%)	草高(cm)																	
	セチピードグラス	93	13																
	ヤハズソウ	15	6																
	チドメグサ	7	3																
	ヒメムカシヨモギ	7	6																

記入の要点

1. 試験条件

- 1) 目的: 「特定植生の維持」の下段に維持する草種名を記述する。
- 2) 区分: 農道、畦畔、一般道、休耕地などの区分を記述する。
- 3) 処理時期: 発生前、生育期など雑草の状態と処理日(月日)を記述する。
- 4) 処理方法: 茎葉処理、土壤処理から選び、記述する。
- 5) 処理時の雑草の状態: 主要雑草の被度(%)と草高(cm)を記述する。

2. 使用量: 1m<sup>2</sup>あたりの製品量で示す。

3. 除草効果: 茎葉処理及び茎葉兼土壤処理は最大効果発現時、土壤処理は処理後30~60日を目安に残草量の無処理区対比を一年生イネ科、一年生非イネ科、多年イネ科、多年性非イネ科、その他を区別して草種別に記述する。

尚、種類の表示は下記のように略して記載する。

一年生イネ科: 「一イ」、一年生非イネ科: 「一非」、多年性イネ科: 「多イ」、多年性非イネ科: 「多非」、その他: 「他」

4. 効果発現の遅速: 変色、葉枯れ、萎凋などの症状が、処理後2~3日以内…「速」、それ以降…「遅」と記述する。

5. 抑草期間: 薬剤処理後、次の防除が必要になった日までの日数を記述する。

6. 特定植生への影響: 特定植生の症状と程度を記述する。

「無」: 害徴なし、「小」: 害徴が認められるが回復する、「中」: 著しい害徴が認められるが回復の見込みがある、「大」: 著しい害徴が認められ、回復の見込みがない。

7. 判定: ○、△、×で記述する。「○」: 実用に供しうると考えられるもの、「△」: 結論が出せない、再検討が必要なもの、「×」: 実用性が期待できないもの。

8. 所見: 試験の要約、実用化に対する所見、今後の問題点等を記述する。

無処理区対比(%)を数値で記入

コメントを記載